



シスの舞い

帚木蓬生



新潮社

カシスの舞い

一九八三年一〇月一日 印刷
一九八三年一〇月五日 発行

定価 一、二〇〇円

著者 糸木蓬生
はなきぎほうせい

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部(03)二六六—五一一
編集部(03)二六六—五四二

郵便番号 一六二

振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社金羊社

製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



© Hosei Hahakigi, 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-331403-6 C0093

カ
シ
ス
の
舞
い

la Danse de Cassis

**A Monsieur le Docteur P. MOUREN,
respect et gratitude**

オテル・コンコルドを過ぎ、J・F・ケネディ通りの終点までくると、海岸公園のなだらかな起伏が見えた。地下鉄建設の際に掘り出した土を集めて造成した広い空間だ。黄色の空を背に、アスレチックの網と丸太が幾何学的な濃淡を彫り刻んでいる。

ダビデの像の前の横断歩道で赤信号になり、公園から帰る家族連れや老人が渡るのを眺めているとき、カーラジオの臨時ニュースが、再び、法王狙撃事件を伝えた。

——今日午後五時十九分、サン・ピエール広場で信者を祝福中のジャン・ポール二世は、凶徒の弾丸を受けて、病院に収容された。犯人はその場でとり押さえられたが、今のところトルコ人と判明した以外、背後関係は不明。法王の容体は依然として重篤、ゼミリ病院で手術中である。法王の他にも二人が巻き添えて重傷を負った。

五時に病棟の巡^{コンセル・ウイジット}回を終えて内勤医^{アン・テムナ}宿舎の自室にいたとき、つけっ放しのテレビが突然番組を中断して特報を流し、その事件を初めて知らされたのだった。

レーガン米大統領の暗殺未遂からまだふた月もたっていなかった。

——いまや法王でさえ標的のターゲットではなくなった。それは、この世界がどこか見えないところでヒビ割れはじめている証しではないか。

アナウンサーが悲壮な声でしめくくった。

後続の車がクラクションを鳴らした。緑信号だった。バックミラーをみながら反撥してみせ、わざとゆっくり発進させた。

ダビデの三叉路を左折し、プラドー通りの一直線にはいった。六車線を車は競り合うようにして流れた。危ういところで信号を渡り切り、ラバート通りからシュロジング通りの坂にかかる、交通量が減った。後方から来た救急車がけたたましい音を残して追い越していった。

蛇行する聖マルグリット通りは、相変らず陰気な感じを持ち、要塞のような造りのユダヤ会館、胸部疾患専門のサルヴァートル病院、血液センター、癌センターなどの建物が並び、その先に聖マルグリット病院があった。

一ヶ月半ぶりにはいる病院の正門だった。入口にあるあがったままの遮断機をくぐり、二十キロの速度制限通りのスピードで、ルノー5を構内に滑りこませた。並木の奥の小児精神科病棟の増築工事は三月の時点から大して進捗していず、骨組みのままの姿を薄闇のなかにさらしていた。マルセイユに五つ程ある大学病院のうち、ここだけが最も古いままに残されていた。プラタナスの並木も建物に劣らず年期がはいり、地上四メートルの高さで枝分れした樹皮には深い皺と、節瘤がついている。病院のシンボルである聖マルグリットの女神像が構内道路の突きあたりに立っていたが、それも野仏のような質素なつくりだった。

中央診療棟脇の駐車場には既に二十台程の車がとめられていた。向かい側のプジョーから出て

きた初老の夫婦が、ポアンソー講堂への道順を尋ねた。講演会への道しるべなどではなく、新参者には分らないのが当然だろう。連れだって歩くとき、彼は市衛生局に勤める役人で、ロータリークラブでのムーラン教授の知己だと自ら説明した。今夜の講演内容が衛生行政に関係があるという理由で招待されたのだという。

玄関ホールを抜けると廊下が鉤型にまがり、天井が頭上スレスレに低くなっている。まるで兵舎ですな、と衛生局の男は首をすくめて言った。低い天井は、病院内で精神科を他の科と隔てる暗黙のしるしでもあった。そこを境にして、手前の棟には、外科、内科、耳鼻咽喉科、眼科、泌尿器科などがあり、むこう側は、ムーラン教授の神経精神科九十床、タトシアン教授の精神科七十床の病棟が隠然と控えていた。ポアンソー講堂は、その精神科二病棟の中間に位置し二百人の聴衆を収容できた。

講堂脇の控え室から熱気と話し声が漏れていた。礼をいう役人夫婦のあとに続いてざわめきの中に足を踏みこみ、三十人程の先客を見渡した。

小柄なムーラン教授の姿はすぐ目にはいった。濃紺の一張羅の背広が目立つわけでもなく、声がひととき大きいというのでもない。ホスト役として招待客に囲まれ、それでいて一ヶ所にとどまらず、絶えず入口の方に気を配りながら動きまわる身のこなしが異彩を放っている。講義や患者診察のときと同様、彼が最も生き生きとする瞬間だった。

ムーラン教授は役人夫婦を招き入れたあと、改めて両手を振りあげ相好をくずしてこちらに近づき、がっしりと手を握った。

「ムッシュウ・ミズノ。よく来た。元気か」

大きな目をむいた顔がほんの数センチの距離で笑っている。パリからマルセイユに来た当初は、会話の際の顔と顔の距離が近いのに驚かされたが、ムーラン教授はほとんど顔をすりよせて

話す。水野は招待の礼を言った。

「どうかな新しい職場は」

「ええ、悪くないです」

「ほう、大変気に入っている、ではなくて、悪くない、かね」

ムーラン教授は水野を見上げた。「あとでポロー教授にそう言っておこう。うちのところにいた内勤医が四月からあなたの教室に行っているが、余り喜んで仕事をしている風ではない、と」
「とはいっても、だんだん喜んで働くようになっていきます」

水野が慌てて訂正したので、ムーラン教授は片目をつぶり、ポンと水野の背中を叩いた。

「わかった、わかった。詳しい話はあとで聞かせて貰うとして、まずくつろぎたまえ」

教授は部屋の隅にある飲食物のコーナーを示した。

テーブルのむこうの給仕人が、アペリティフに何がいいかを聞き、水野の注文通りガンベッタでグラスを満たしてくれた。

「ムッシュウ・ミズノ」

振りむきざまに勢いよく名前を呼ばれた。教授秘書のラバトール夫人が抱き寄らんばかりの姿勢で待ち構えていた。水野は手にしたグラスに用心しながら、突き出された彼女の肉厚な両の頬にキスをした。

「ひと月以上も音沙汰なしね。ティモース病院に移ってからも時々は立ち寄ると言ってくせに、一度も顔をみせないなんて。ぜひ今夜来てもらうようにムッシュウ・ムーランに入れ知恵したのは私ですよ。いわば召集令状」

彼女は肥満体をゆすって豪快に笑った。

「法王のニュースは聞きましたか」

笑い終えると、急に真顔になって声をひそめた。「恐しい世の中になりました。法王様に銃を向けるなんて」

「犯人はトルコ人らしいけど」

「どうせ、連中のやることですよ。アルメニア人にも残虐の限りをつくした性悪な人種」

彼女は眉をつりあげ、テリーヌの大きなかたまりを口の中で忙しく咀嚼した。嚙下したあと、思い出したように水野をムーラン夫人のいる場所へ促した。

ムーラン教授夫人は夫と離れて、招待客とふたこと言葉を交わしては、若い頃の美貌を彷彿とさせる顔をほころばせていた。水野が挨拶し、近況を尋ねると、彼女は自分のことはさておき、次男のミッシェルが夜学ではあるがパリの東洋語学校で日本語を習いはじめた、と嬉しげに言った。四人の子供のうちの末子であるミッシェルは、パリのグランゼコールに通う秀才で、両親の氣に入りだった。前の年のクリスマスに帰郷した際に一度だけ会ったことがあったが、父親程の社交性はなく、氣恥かしげに時代物の鍵のコレクションを見せてくれた。

「コレージュ・ド・フランスで、バルトの講義に出て、ハイクを知って以来、日本語には興味を持っていましたよ。バルトが交通事故で亡くなったときは、本当にしよ返っていました」

ムーラン夫人は言った。

「フランスも次々と財産を失っていきますね。ロラン・バルトの前にはサルトル、その前にはアンリ・エイ、そしてつい去年の末にも、アルチュセール悲惨な妻殺しがあったばかりだし」

右手に白ワインのグラスを持って会話に加わったのは、ポアンソー助教教授だった。ムーラン教授以上に頭は禿げ上がっていたが、顔の下半分をおおう黒々とした髭が四十代相応の精悍さをもし出している。後方に半歩退くようにしてポアンソー夫人が立っていた。

「そうそう、そういう事件もありましたね」

助教授夫妻に挨拶を返しながらムーラン夫人は答え、水野も続いて手を握った。

「偉大な思想家が消えていくフランスに、ムッシュウ・ミズノも失望したのじゃないかな」

ポアンソー助教授が皮肉っぽく目を細めた。何か気の利いた返事を期待するときの癖だったが、水野の方ではあいにくこれまでも彼を満足させるような返答をしたためしはなかった。

「哲学はいざ知らず、精神医学にはまだそうそうたる巨人がいますから」

水野の答えに相槌をうったのはムーラン夫人だった。ポアンソー夫人もつられるようにして頷いた。

「ムッシュウ・ミズノもフランス人以上に外交官になった」

助教授が笑いながら白ワインを飲みほした。何冊かの著書を持つ精神分析医であり、かつアルコール依存症の専門家であるくせに、酒には目がなかった。かつて新聞記者を前にアル中対策で一席ぶった際、テーブルの上にワインを置いていたので物議をかもしたこともあった。

「確かに、ムーラン教授に続いてポロー教授と、二大パトロンの許でアンテルヌを勤められるきみは運がいい」

ポアンソー助教授が水野に言ったとき、最高潮に達していた部屋のざわめきが一瞬低くなった。入口にポロー教授とルー助教授の姿があった。ムーラン夫人が、別の一団のなかにいた夫と連れだって素早く出迎え、ポアンソー夫妻もそれに従った。

ポロー教授の方は夫人も同伴していた。マリンブルーのブレザーとレンガ色の無地のネクタイは日頃のままであった。一メートル九十の堂々たる体軀を持ち、ぶ厚い肩の上にゴマ塩頭の赤ら顔ががちりとのっかっている。茶色のロイド眼鏡の奥の眼は、微笑しながらも間断なく部屋の様子を探っているようにみえた。ポロー教授夫人も背が高く、整った顔だちをしていたが、その美しさは年齢に相殺されて全く効力を失っていた。ほとんど表情をくずさず、ただ夫のあとについ

て軽く会釈をした。ルー助教教授は、左眼が義眼のせいで、話に聞き入るときに顔が傾き、そのせいで一見愛想の良い印象を与えた。

ポロー教授は、全く如才ない完璧なまでのムーラン教授の応対に顔を柔らげたが、決して声を出して笑わなかった。ポアンソー助教教授夫妻、そしてムーラン教授が次々と紹介する年配の招待客たちに、口許だけでつくる微笑で応じた。

「トシオ」

窓際のテーブルから水野を招いたのはモリス・オハヨンだった。浅黒い顔が人なつこく笑い、同じテーブルには彼の妻ジゼル、理学療法士のバルケローが居た。水野は坐るべき場所をようやく見出した気持になり、安堵した。

「お前が来るとラバトール夫人から聞いて楽しみにしていたんだぞ」

モリスが水野の新しいグラスをロゼで満たしながら言った。

水野と同じ三十歳だが、薄い頭髮と口髭のために五つ六つは老けてみえる。父親はユダヤ系のフランス人で、母親はモロッコ人だった。高校までモロッコで勉強し、マルセイユに出て医学部を卒業するまでの苦労話は何度となく聞かされた。ポアンソー助教教授の信頼の厚いアンテルヌで、助手試験に合格すれば、文字通り片腕としてポアンソー助教教授の許で働くポストが用意されている。妻のジゼルはカンヌ出身のやはりユダヤ系で、小児科医だった。

「ティモシーヌ病院でもリラクセーションはやっていますか」

髭もじやのバルケローが聞いた。彼についてトレーニングを受けた自律訓練法を、ポロー教授の教室ではまだ使う機会もなかった。

「今のところ全然。あそこは薬物療法中心だから仕方がない」

水野は答えた。

主賓たちのテーブルから料理がいきなりつつあった。満席のテーブルの間を三人の給仕が機敏に動いて、料理をくばって回る。マルセイユの一流レストランが出張し、調理を終えた肉を冷さないで運びこみ、六十人の招待客をまかなうのだ。ポロー教授夫妻を囲んで、ムーラン教授やポアンソー助教授夫妻が歓談し、その横では、駐車場で会った衛生局の初老夫妻とルー助教授が話しこんでいた。

「ポロー教授とムーラン教授、二つの対抗する城^{シヤトリ、リッポ}という感じね。クロサワの『カゲムシヤ』に出てくるような」

ジゼルが小声で言った。

「しかし、これまでのところ、ポロー教授の方が旗色が悪いのじゃないかな。大きな身体はムーラン教授の前でぎくしゃくするばかりだし、夫人に至っては、黒く萎えたチューリップ」

水野の皮肉に、モーリスは大仰に喉をつまらせてみせた。

「しかし、無理ないさ。一方は人徳と社交でもつ教授だし、他方は研究オンリーだ。こんな場所では、はじめから勝負は知れている」

モーリスは皿に盛られた仔羊の肉をうまそうに頬ばった。「しかしね、研究面でのポロー教授は、アルジェリアでの助教授時代から続いている麻薬中毒の研究、薬物療法と電撃療法に関する研究、最近ではお前も知っている通り分裂病の生化学、とどれをとっても一流の仕事をしてきている」

向かい側のテーブルに坐ったラバトー夫人が、大口をあけ、パンをかじるようにしてカマンベールにくらいついていた。ほど良く焼けた仔羊の脚は柔らかく、添えられた白いんげんの軽い甘みも口あたりが良かった。軽く冷したロゼに酔いを感じながら、水野はアブリコのタルトを口にもっていった。

「ヒロヒトが撃たれたことはあるか」

突然モーリスが訊いた。ヒの発音が出来ずに、「イロイト」に聞えた。

「ないね」

「どうして」

モーリスの茶褐色の目が水野を直視した。

「分らない。考えてみたこともない」

水野は答えた。

「そうか。俺は法王が撃たれたと聞いて、今までそういうことがなかった方がおかしいと思った」

モーリスはグラスに残ったロゼを飲みほした。「たぶん、不信心のせいだ」

拍手がおこっていた。ムーラン教授が立ち上がり、講堂の方に移動する時間だと告げた。

「これはムッシュウ・ポアンソーから聞いた話だけど——」

モーリスはジゼルの椅子を引いてやりながら、しゃべり続けた。「ミッテランが勝った翌朝、ムーラン教授はがっくり肩をおとしていたらしい。例の黒カバンを重そうにさげて、部屋にはいつてくるなり、『おお、ポアンソー、私は破産した』と言ったそうだ。社会党政権になったら財産没収になると、未だに心配らしい」

モーリスは笑った。

「あの日、クルマに金銀を積んで逃げだそうとした金持ちが何人か、スペイン国境で捕まっただろう」

水野は紙ナプキンで口をぬぐった。

「どっちの政権になろうと、俺たちにはたいして変りはないのだがね」

モリスが言った。

控え室から講堂へ通じる扉があけられ、招待客は列をつくって動き出していた。

階段講堂の席には百人程が既に着席していた。直接講演だけを聞きにきた聴衆だった。

水野はモリス、ジゼルと並んで、後方寄りに席をとった。

ムーラン教授は演壇の前に立ち、ほとんど埋まった観客席を満足気に眺めた。

演壇の側壁に肖像写真がかかっている。内科教授在職中にアルジェリア戦争で殉死した、ポアンソー助教授の実父だった。現職の教授が死んだ場合、主だった建物にその名が冠せられるのだ。ムーラン教授は全員が着席するのを待って口を開いた。晩餐会のスポンサーが、レダリー製菓であることを報告し、担当者を起立させ、拍手を送った。地味なスーツを着たレダリー社の男は観客にむかって、顔をこわばらせて返礼した。拍手の波がひき終ると、ムーラン教授はポロー教授の紹介に移った。

「今夜の講演者については、今さら私から申し上げる必要もなく、フランス精神医学界が誇る臨床家であり、卓越した研究を発表し続けているプロフェッサー・ポローであります。今でこそ、生物学的精神医学は大きな潮流になっておりますが、ひと昔までは、精神医学といえば心理学と哲学が合わさったような、およそ医学とは縁遠いものであったのです。そこに、生理学、生化学、薬理学の方法論を組み込み、科学の名に値する精神医学を育て上げたのは、ポロー教授であります。教授を私どもの講演会に招きたいというのは、私の長年の願いでありましたが、今夜、ようやくにして夢がかなったのであります。快く講演をひきうけていただいた教授に心からの謝意を表します」

ムーラン教授が言い終えぬうちに、ポロー教授は巨体を座席から浮かせ、微笑を返しながらゆつくりと演壇の方に歩を運んだ。ゴマ塩頭を支える赤土色のうなじと、幅広い肩が重戦車の出陣

を思わせた。

拍手のなかで、精悍な顔をまっすぐ聴衆に向け、ロイド眼鏡の奥の眼を見開き、演卓の上のマイクを手前に引きよせた。短い沈黙があった。

——このマルセイユで、精神科関係の学会は年に少なくとも三回は開かれます。いつもの、ゆったりとした太めの声だった。

——それは、全国的な規模の学会であつたり、南仏の地方会であつたり、さまざまです。しかし、そのどの学会も、私の古くからの畏友プロフェッサー・ムーランの主催で月一回開かれるこの講演会に比べると、人気の面でも、愉しさの面でも、また内容の豊かさの面でも優れることがない、これは私が、友人、知人、同僚から幾度となく聞かされてきたことでした。そのたびに羨望を禁じ得なかったわけですが、今夜こうして講演者として招待を受けたことを無上の幸せに感じます。しかし一方、果して、皆さんの期待を満足させるべく、私とその勤めを全うすることができかどうか、心もとない限りですが、これから一時間あまり、全力を尽くして試みてみたいと思ふのです。

いくらかは思わせぶりな、しかしソツのない出だしだった。

「なかなか大したものだ」

傍のモーリスが感心したように言い、水野も同感した。

——与えられたテーマは、「麻薬」^{ドラッグ}、それに私は、「沈黙の受難」^{パッシオン・ミューゼット}という副題をつけてみました。そう、決して表舞台に出ることなく、じわじわといつのまにか身体も心も蝕まれ、悲惨な死を迎える、しかもそれは救済への道でも何でもない苦業という程の意味です。

ポーロ教授の表情は全く動かなかった。無感動が顔にはりついている。腕時計をはずして演卓の上に置いた。

——麻薬の歴史は文明と共にある、と言っても良いでしょう。エジプトの古代人も栽培していました。周知のように、ホメロスの『オデュッセイア』にも、ゼウスの娘ヘレネーが、メネラスに頭痛を忘れさせるために飲ませた、という叙述があります。しかしながら、麻薬が本格的にヨーロッパにはいつてきたのは十九世紀初頭であり、当時の詩人たちはこぞってこの不思議な薬に飛びつき、多くの文学作品を残しました。例えば、トマ・ド・ケンシー、テオフィル・ゴーティエ。そしてまたかのボードレールも『人工楽園』のなかで自分の麻薬体験を語っています。いわく、
“天井はますます青味を帯び、ついに水平線上の海と化し、星が、金色の睫^{まつげ}をもつまぶたを開きはじめる。無限に細かい睫が、部屋全体をプリズムの光束で満たしてしまう”。

ポロ教授の口から、詩句の一節がよどみなく発せられた。水野の頭の中でボードレールとポロ教授がなかなか結びつかなかった。その思いはモーリスも同じなのか、肘で水野の肩をつついて、これはみものだという仕草をした。

——こうした文学的興味の時代の次に、医学的関心の時代が訪れます。われわれフランス精神医学の祖ともいべきモロ・ド・トゥールが、印度大麻による幻覚作用について実に立派な論文を書いたのが一八四〇年のことです。それから一世紀半の間、医学は、とくに精神医学は、麻薬の問題から決して目を離すことはありませんでした。一方では社会学、犯罪学、心理学、他方では薬理学、生化学と絶えず連係プレーをとりながら、「沈黙の受難」という不幸に闘いを挑んできたのです。

確かに見事な話の展開だった。場内は静まり返り、モーリスでさえ減らず口をたたくことを忘れていた。

教授は感情を押し殺した単調なしゃべり方をした。聴衆に愛想をふりまくことも、自分の弁舌に陶醉して、ひとり活気づくこともなかった。